

# 文学にみる恋愛と結婚について

—— 研究ノート ——

## A Note on Love and Marriage in Literature

川 崎 佳 代 子

今日では、恋愛は自由で、結婚はその延長上にあるというのは当然と思われているが、歴史を振り返ると、恋愛結婚は比較的最近の現象といえる。

脳内物質と恋愛感情の関係を研究している人類学者ヘレン・フィッシャー (Helen Fisher) 氏によると、熱烈に愛し合っているカップルの脳内を fMRI (機能的磁気究明断層撮影装置) で検査した結果、どのカップルも脳の共通する場所が激しく活動しているのがわかるそうだ。その部位は、すべての脊椎動物に共通する原始的な脳の分野であるという。つまり、恋愛感情は非常に古いものであるということになる (『朝日新聞』日曜版2009. 8. 22)。したがって、「恋」は人間の根源的な情動であるといえるだろう。

プラトンは『饗宴』の中で2種類の愛について述べている。1つは「天上的な愛」で、魂の和合、精神の魅力に基づく愛である。もう1つは「地上的な愛」で、肉体の満足を求める愛である。前者は男同士に存在する愛であり、後者は異性間だとしている。後世プラトニックラブという用語、清純な精神的愛を指すが、本来的には男性同士の愛を指すのであった。

中世文学の泰斗であるC・S・ルイスは愛を4つに分類した。「ストルゲー」(家族間の愛やペット・動物などへの愛など広く一般的な愛情を指す)、「ピリア」(友情)、「エロース」(恋愛)、そして「アガペー」(神愛)である。恋愛に関する愛はもちろん「エロース」である。ルイスは性愛も恋愛の一部だが、恋愛は必ずしも性愛がなくても存在すると述べている。ルイスによると恋愛とは特定の一人の異性を欲せしめる状態をいう。

恋愛という個人の意識の中で起こる感情は貧富の差や階層の差に関係なく存在したはずである。しかし、結婚となると別の要素が加わるのは周知のことである。

結婚という習慣が制度化されたのは、男性間に女性が秩序正しく分配されることを保証するためであり、また女性を巡る男性間の競争に規律をもうけ、生殖を公認し、社会化するためであった。この習慣は、誰が父親であるのか名指すことによって、唯一の明確な親子関係である母と子の関係に、もう一つの親子関係を加えることになる。また合法的な結婚

を他から区別して、そこから生まれる子どもに相続人の資格を保証する。すなわち、先祖の名とさまざまな権利を与えるのである。結婚は貴族関係の基礎を作り、そして社会の土台を築く。社会という建物の要石を形成するのである。(ジョルジュ・デュビー『中世の結婚』篠田勝英訳、阿部謹也『西洋中世の男と女』よりの引用)

したがって、結婚には必ずしも恋愛が必須条件とはならない。今日においても、恋愛に関係のない理由で両親の選んだ相手と結婚する人は少なくない。

文学では古くから恋を結婚に結びつける欲求を描写しているが、恋愛結婚が社会一般の結婚形式ではなく、前野みち子氏の言うとおり、むしろファンタジックな話として楽しまれたと考えられる。ここでは恋と結婚に関する作品をいくつか取り上げてみたい。

## 1. 『オデュセイア』

ホメロス作と言われ、聖書を除いて西洋文学に最も大きな影響を与えた作品だとみなされている。主人公のオデュセウスはイタカというギリシャの1領主であるが、メネラオスとヘレンの結婚の際の盟約によりトロイとの戦争にギリシャ軍として参加する。妻子を残して出陣し、トロイ陥落まで10年、帰国に10年費やした。『オデュセイア』はトロイ戦争終了後イタカ帰還までのオデュセウス10年間の放浪の物語である。この物語を読む限り、オデュセウスが帰還を目指すのは、一に領主としての責任である。また息子に対する父としての責任である。つまり「家」の長としての義務といえる。妻ペネロペイアへの愛情についてはふれられていない。妻は彼にとっては、「家」に付随する当然のものであるようだ。放浪の途上で、キルケやカリブソに誘惑されたとき、また、連喰い人の島で忘却に身を任そうとする際に彼をせき止めたのは、妻への愛であるとは描かれていない。

また、オデュセウスの留守中、ペネロペイアに言い寄る大勢の求婚者たちも、ペネロペイアの愛を得ることが目的ではなく、オデュセウスの土地財産を得ることが目的である。さらにこの作品が夫婦愛にあまり関心を示していないのは、オデュセウスがみずほらしい姿に身をやつて家に戻ったとき、主人だと気づいたのは乳母で、妻ではないことから伺える。

この叙事詩は数回映画化されているが、ほとんどが冒険ものとして扱われている。フランシス・F・コッポラ制作の『魔の海の大航海』(1997年)では、数々の誘惑に負けず妻を思うオデュセウスが描かれていたが、古代の作品にはロマンティックな夫婦愛はあまり見あたらない。

## 2. 『聖書』における恋愛と結婚

日本では約7割のカップルがチャペル式結婚式を好んでいるようである。司式する牧師や神父はセレモニーの中でキリスト教における結婚観を語るのが常である。聖書を文学に入れることには若干問題があるかもしれないが、聖書は「創世記」2章で早々と結婚について言及して

いる。神が人間を創造する際、人が一人でいるのは良くないとのことで、アダムの伴侶が造られる。そしてアダムは伴侶イブを見て「ついに、これこそ、わたしの骨の骨、肉の肉」と言い、「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」（「創世記」2：23-24）と聖書は結婚を規定している。また、「マルコによる福音書」では、「天地創造の初めから、神は人を男と女とに分けてお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」（「マルコ」10：6-0、「マタイ」19：4-6）とある。こうした記述からは恋愛が問題にされているとはいえない。「ヨハネによる福音書」2章の「カナの結婚式」において、イエス・キリストは結婚式を祝しているが、恋愛については何の言及もない。

『聖書』の一番のテーマは「愛」であるが、ルイスの分類で言う「アガペー」が中心である。愛の章といわれるパウロの言葉も愛神、愛隣、慈しみの愛など、夫婦愛はふくまれても、いわゆる恋愛とは違っている。事実、終末を念頭に置いているパウロにとって、結婚するよりは独身をとおすすめが良いと考えていた。後に教会は民事であるはずの結婚に介入し、教会が認めないかぎり正式な婚姻とはならないとする。また「洗礼」等と共に7つの「秘蹟」の一つとして讃えるが、恋愛はふれられていない。

数少ない例外として、『聖書』の中で「雅歌」は恋愛を謳っている書である。以下のように、乙女と若者が交互に思いを告白している箇所がある。

恋人よ、あなたは美しい、あなたは美しく、その目は鳩のよう。（「雅歌」15）

恋しい人、美しいのはあなた

わたしの喜び

私たちの寝床は緑の茂み。

レバノン杉が家の梁、糸杉が垂木。（16.17）

文学的な表現で夫婦愛や情熱的な恋が歌われている。だが、ややエロティックな描写が問題になり、神学者はアレゴリカルな解釈をつけ、「愛する人」は教会を指すのだとするむきがある。

### 3. 宮廷風恋愛

ヨーロッパがキリスト教の影響下に入ると、古代ローマ（財産を守り、政治や権力とかわるためのもので、相互の合意が前提となる）やゲルマン的（正式な結婚 [ムント]、和合結婚 [フリーデルエーエ]、略奪結婚）な結婚観が教会の考え方に折り合いをつけていった。一方恋愛は結婚とは別のものと考えられていた。女性は男性と対等とは見なされず、男性にとって愛

とは肉体的な満足を得るためのものであった。また、『メディア』や『アイネーイス』のディードに見られるように、恋愛は狂気と考えられていた。メディアはイアソンと駆け落ちするため、弟を八つ裂きにする。また、イアソンの愛が彼女から別の女性に移った時、その女性と父を惨殺する。さらにイアソンとの間に生まれた息子も殺してしまう。恋愛というより情念という方がふさわしいかもしれない。このように、女性が男性の欲望の対象となる一方で、女性は官能の虜だとされ、女性蔑視も相俟って、チョーサーの『カンタベリー物語』では、「パースの女房の前口上」においてパースの女房の亭主に「女の愛なんぞ地獄のようなものだとか、水さえたててゆかれない不毛の地」（チョーサー、75）だと言わしめている。5世紀の聖ヒエロニムスは、女性はイブの末裔、諸悪の根源、たえざる誘惑者、人間の種の保存のための必要悪とまで言ったという。すでにファム・ファタールのアーキタイプができあがっていたと言えよう。

ところが、11世紀後半から12世紀頃、南仏プロバンスの宮廷を中心に全く異質の愛が歌われるようになった。トルバトゥールの恋愛詩である。最初のトルバトゥールはアキテーヌ公ギョーム9世だと言われる。彼は女性を肉欲の対象と見ている一方で、貴婦人の美しさを称え、献身的な恋人の姿を描いた詩を残している。トルバトゥールは「至福の源泉」を貴婦人に見だし、憧憬と崇拝をもって意中の女性に奉仕する喜びを謳ったのである。つまり、それまでの肉体的な快楽に結びついていた愛を精神的な愛に昇華させたと言われる。13世紀にギョーム9世の娘エリアノール・ダキテーヌがフランス王ルイ7世と結婚し、北フランスに行き、その娘マリーが北フランスの宮廷で文学サロンをサポートする。アンドレアス・カペラヌス、クレティアン・ド・トロワなどが集い、いわゆる「宮廷風恋愛」が花開いた。

宮廷風恋愛が流行する背景には、いくつもの要因があったと言われるが、大きな要素としては経済、文化の安定があった。水野尚氏は「文化の高まりは、地上的なものから離れ、天上的な理想に向かう精神の動きと対応」と述べている（水野 8）。これにはプロティノスによる新プラトン主義というエトスが関係しているとも言われる。A・O・ラブジョイは西洋の思想史にはプラトンのものとアリストテレス的なものの見方の交代があると指摘している（Arthur O. Lovejoy, *The Great Chain of Being*）が、プラトンの物の見方とは、天上的な思考（otherworldliness）であり、アリストテレス的な思考とは地上的な思考（thisworldliness）である。その他、十字軍の遠征により、イスラム文化のヨーロッパ伝播（道徳的で、洗練されたたしなみなどが認識された）、12世紀の南仏アルピノ地方のカタリ派の観念、シトー派のキリスト教神秘主義とマリア崇拝などが挙げられる。また、女性崇拝にはケルト法にみられる男女同権なども若干の影響があると指摘されている。

宮廷風恋愛とは、耐えられないほどの愛の痛みをさす。トリスタンはマルケ王の妃となったイゾルデに対し、「わが恋人イゾルデ、なんじはわが死、わが命」（シュトラースブルク『トリスタンとイゾルデ』 326）と言うように、恋愛は一つの恐るべき運命と認識しているのである。報いられることを目的としていないので、愛が憎しみに変わることはない。「むしろ、渴

望と、恋に焦がれる心は、拒絶によってますます慕って」いく。「このようなトルバトゥールの恋愛観は『精美の愛』と呼ばれて」（水野、16）いる。

しかし、宮廷風恋愛の形は封建制度の「君主」と「騎士」の関係に基づいている。水野氏の図式を引用すると、以下のとおりである。



新しいと思われる恋愛の構図が当時の封建制度を下敷きにしているのは興味深い。臣下が君主に忠実であるように、騎士は貴婦人（君主の妻）に忠実である。現実には、封建社会において貴族の結婚は愛とは無縁な政略結婚であった。したがって、一部の例外はあるが、宮廷風恋愛というのは城主である夫とその妻、若い騎士によって形成される三角関係で、基本的に不倫である。

ここで宮廷風恋愛の代表である、アーサー王と円卓の騎士に関する物語を参考に見てみたい。サー・トーマス・マローリー作『アーサー王の死』（1470）は、イギリス、フランス、ドイツなどヨーロッパに流布していたアーサー王と円卓の騎士に関するさまざまなロマンスを纏めたものである。アーサー王物語に宮廷風ロマンスを加味したのは主としてマリー・ド・フランスの宮廷に集っていたクレティアン・ド・トロワ（1130～1191）だと言われる。その中でも「荷車の騎士」はアーサー王の妃ギネヴィアと臣下のランスロットの恋が描かれている。ギネヴィアのどんな要求にも喜々として従い、騎士としてのプライドを捨てても命がけで貴婦人の救出に赴くランスロットの姿が語られている。

マローリーの作品においてもランスロットとギネヴィアの恋にかなりの紙面が割かれている。君主と騎士と貴婦人の関係が不倫であるが故に、最終的には理想の王国であったキャメロットを破滅に導く経緯が描かれている。ただ一途に最愛の貴婦人に献身するランスロットは理想的な「恋する人」である。たとえば、ランスロットを密かに愛するエレヌという女性は、魔法の力を借りギネヴィアのふりをしてランスロットに近づく。ランスロットは自分の誤りに気づくと取り乱し、長い間正気を失ったとある。また、トーナメントでギネヴィアの注文通り、あるときは道化に近い間抜けな騎士を演じ、あるときは無敵の武芸家として面目躍如する様子が描かれている。どのような無理無体も愛する人のために行う覚悟があるのだ。このように、恋する騎士は喜びと人間性の向上を得るとされる。

恋愛をするとすべて変わって見え、寒さも雨も風も苦にならないどころか、素晴らしいも

のとさえ感じられます。そして、喜びに満たされた心は、恋愛にとらえられた人を優しくし、より良い存在へと変えていくのです。(水野 29)

これまで情熱的恋愛は非理性的とされ徳とは見なされなかったが、12世紀の新しい恋愛観は人格の向上に繋がる、洗練された行動と考えられたのである。また、恋する者は、一定の戒律、手順に従わなければならないとされた。「愛の十戒」「恋の12箇条」「31の規則」などが定められ、模擬裁判のような恋愛談義を宮廷の女性たちは楽しんだという。とくに、エレアノール・ダキテーヌや娘マリーなどによる愛の裁定が有名である。

「愛の十戒」を描いたアンドレアス・カペラヌスはマリーの宮廷附属の宗教家であったらしい。彼は『宮廷風恋愛の技術』で宮廷風恋愛について詳述しているが、最後まで読むと、不倫を前提とするこうした恋愛観には賛成していないことがわかる。

いずれにしろ、宮廷風恋愛にあっては、God is Love という概念は Love is God に倒置され、神は神でも、愛の神キューピッドに仕えることを楽しんだと思われる。最初の聖書の Love はもちろんアガペー（神愛）を指し、宮廷での Love はエロース（恋愛）である。

こうして12、3世紀に流行した宮廷風恋愛は愛と徳を結びつけることで倫理的な効用ももたらしたという。恋愛は、粗野な者を洗練させ、生まれの低い者を人格優れたものにし、傲慢なものを謙虚にする。また、恋する人は他の人々にも親切である。愛の対象者をあらゆる美德でかざり、唯一人の女性に貞潔を捧げるからである。騎士道精神と密接に関係する宮廷風恋愛の成立により、初めて西欧文化が形作られたとルイスは言う。

[トルバトゥールは、] われわれの倫理、われわれの想像力、われわれの日常生活のごとくを変革し、われわれと過去の古典時代、あるいは現在の東洋とのあいだに越えがたい障壁を築いたのである (ルイス、『愛のアレゴリー』玉泉八州男訳 5)。

宮廷風恋愛がどの程度現実のものだったか定かではない。アーサー王物語や『薔薇物語』『恋する男の告解』といった文学作品には確かに華々しく謳われている。しかし、チョーサーの作品になると、宮廷風恋愛はどちらかというと皮肉られているようだ。一つ言えることは、結婚は個人的な感情の問題ではなく、家と家を繋ぐ制度であり、恋愛は個人の問題である。したがって当時恋愛は結婚の枠外で成立する他なかったといえよう。また心を痛いほど焦がす恋は非日常のものであり、結婚は現実的な日常の世界にあるのだ。水野氏は宮廷風恋愛を「イスラム経由のプラトンの愛の12世紀的表現」と定義している。ジャック・ル＝ゴフは「宮廷風恋愛はもっぱら文学の産物であって、想像の世界の域を出なかった」(『世界でいちばん美しい愛の歴史』、84)と指摘している。

#### 4. シェイクスピア劇にみる恋愛と結婚

次にシェイクスピアの作品を取り上げてみよう。まず女性の描き方から見ると、シェイクスピア劇には一方に悲劇、史劇、もう一方に喜劇、ロマンス劇とはっきりとした違いが見られる。悲劇や史劇では、女性は男性と同等の扱われ方はしていない。『ハムレット』において、母ゲートルドは夫の死後すぐ義弟と結婚する「弱き器」である。官能的な女性とも思われる。オフィーリアは父や兄の支配下にあり、自分の意志というのを持っていないように描かれている。『マクベス』ではマクベス夫人は夫をそそのかして主君殺しを実行させる一見強い女性だが、いざとなると正気を失ってしまい、悲劇の主人公たりえない。また、史劇の女性たちはほとんどが政治に翻弄される人物である。

シェイクスピア劇で女性が活躍するのは喜劇においてである。代表的な作品は『ヴェニスの商人』であろうか。ここ一番のとき、男性に任せず、男装してヴェニスの法廷に乗り込み、有能な弁護士顔負けの弁舌をふるうポーシャがいる。法律を盾にとって一歩も引かぬシャイロックの足をすくうのは彼女の機転である。それに比べると、アントニオもバッサーニオも今ひとつ魅力に欠けるのだ。親の決めた結婚の手順を見事自分の意志に添う形にしてしまい、バッサーニオの箱選びを誘導するときの抜け目のなさもポーシャの魅力となっている。

『十二夜』では、双子のヴァイオラが男装して貴族に雇われ、最後に恋愛を結婚まで導くことに成功する。ヴァイオラに比べると、オッシーノ侯爵も彼女の双子の兄も精彩に欠けるのだ。『お気に召すまま』ではロザリンドが男装して最後には恋を得る。しかし、いずれにしても活躍する女性たちは男装しているのが共通点である。男性中心の社会において、女性が自己を主張するためにはしよせん男性をとおしてしか表現できないのであろうか。

『夏の夜の夢』は一つ間違えると『ロミオとジュリエット』のような悲劇になるところだが、女性たちのはっきりした意思により、二組の恋愛結婚が成立する。とはいえ、妖精たちが仲立ちをすることで恋愛結婚が成立するのだから、恋の道が茨であることに変わりがない。

シェイクスピアの悲劇と喜劇を比べると、前者では男性を中心に悲劇的な世界が展開し、後者は女性の賢さにより恋愛から結婚というハッピーエンディングとなる。うがった見方をすると、愛のある結婚には女性の力が必要だと言えよう。とはいえ、シェイクスピア時代においても結婚は恋愛とは別の問題であり、だからこそ喜劇において恋愛結婚を扱ったのかもしれない。シェイクスピアの喜劇は現実的な日常とはかけ離れたものだから。前野氏が以下のように述べているとおり、シェイクスピアの時代、喜劇というのは息抜きのための装置と考えることができよう。

恋愛は本来的に社会秩序と相容れない、社会秩序を破壊する情念と考えられたから、社会秩序の枠内に慣習や制度として組み込まれ、秩序維持に寄与する結婚とは初めから別の次元にあった。恋愛は社会秩序を毀損しない範囲で、あるいは社会の側が自身の加える制度

的圧力からしばし息抜きさせるために用意した装置の中でのみ許容された。(前野、3)

## 5. 18世紀の小説 『パメラ』

小説 (novel) はサミュエル・リチャードソンの『パメラ』(1740) が嚆矢だと言われる。中産階級中心に発達した小説という形式は、ロマンスや冒険物語のようなプロット中心から、人間心理の機微を描写することにシフトが移っている。したがって、恋愛から結婚へのプロセスを描くには小説は格好の形式と思われる。『パメラ』では身分違いの恋が結婚にたどり着くまでの紆余曲折を描いている。純潔を守り抜くパメラが、女性を肉欲の対象としか見なかったミスターBを改心させ、パメラを理想の妻として迎えるまでを描いている。すでに、社会的背景として、恋愛を経て結婚に至るのが望ましいという考え方が出てきていると思われる。今日の読者からすると、パメラは純潔を武器にしているとして、かえって好感が持たれないかもしれない。

## 6. 19世紀の小説—『自負と偏見』(1813)

19世紀初めに活躍したジェーン・オーステンの小説は結婚がテーマで、すべて「夫探し」に尽きるといえる。夏目漱石が絶賛したという『自負と偏見』の書き出しは以下のとおりである。

独りもので、金があるといえば、あとはきっと細君をほしがっているにちがいない、というのが、世間一般のいわば公認真理といってもよい。

はじめて近所へひっこしてきたばかりで、かんじんの男の気持ちや考えは、まるっきりわからなくとも、この真理だけは、近所近辺どこの家でも、ちゃんと決まった事実のようになっていて、いずれは当然、家のどの娘かのものになるものと、決めてかかっているのである。(『自負と偏見』中野好夫訳)

オーステンの時代、財産は限嗣相続によって男性に家屋敷が相続されるので、娘をもっている親は気が気ではなかったのだ。『自負と偏見』の中では4組の結婚が描かれている。主人公のエリザベスは世俗的な物欲や価値観を嫌い、自己に忠実であろうとする。したがって、家屋敷を相続するから好都合というだけの理由で好きでもない従兄弟と結婚することは矜持が許さない。そうした中で、友人のシャロットがいつの間にか従兄弟と婚約をしてしまう。シャロットの目的は「一に結婚ということだけにあった。」そして、「高い教育はあっても、財産などはろくにない娘にとって、結婚は唯一の口すぎの手段とも言えたし、たとえ幸福への保証はおぼつかないにせよ、飢えを免れる手段としては、いちばんたのしい方法にはちがいがなかった」と考えたからである。友人から打ち明けられたエリザベスにとって、「まさかいざという場合、ただ世俗的利害だけを考えて、その他の気持ちは一切犠牲にしておこうなどとは、夢にも思っ



ていなかった」のである。エリザベスは友人の結婚観にも賛成できなかったが、妹が衝動的に結婚するような性愛を中心とする結婚にも賛成していない。エリザベスにとって、結婚相手は敬愛する人物でなければならないのである。1813年に描かれた『自負と偏見』の結婚観は決して古くない。ついこの間まで結婚は女性にとっては、経済的安定を求める公認された手段であったし、現在もその考え方は現実としてある。現代との違いは女性の経済的自立が進み、離婚率が上がったことであろうか。エリザベスの結婚観は現代のわれわれから見るときわめて常識的であるが、この当時、困難な道でもあっただろう。ちなみに、作者オーステンは生涯独身であった。

## 7. シャーロット・ブロンテ『ジェーン・エア』(1847)

1847年に出版されたブロンテの『ジェーン・エア』は、幾多の茨の道を経た後恋愛が結婚にたどりつくという物語である。主人公ジェーン・エアは美人ではなかったが、知的で魅力的な女性であったため、勤め先の主人ロチェスターに愛され、彼女も彼を愛するようになる。しかし、二重結婚という事実の前にジェーンは家を出る。その後宣教師を志すセント・ジョンに求婚されるが、この申込みは愛からではなく、ルイスのいうピリア(同志愛)に近いと考えたジェーンは拒絶する。結局、ロチェスターの妻は亡くなり、彼自身も火事の時に受けた傷で失明し体も不自由になる。その状態で再会したジェーンはようやく彼と結婚するに至る。

オーステンの小説が向こう三軒両隣を背景にした家族的な宇宙を描いているのに対し、『ジェーン・エア』はゴシック風のロマンスに近い。チェスタトンが『ヴィクトリア朝の英文学』で指摘しているとおり、「現実の男性が望む以上に男性的な人物とすることによって」(チェスタトン、101～2)逆に現実味が薄い感じがする。とはいえ、主人公ジェーンの結婚観は非常に明確である。それは作者自身の結婚観と同じだからと思われる。ブロンテは求婚されたことがしばしばあったが、その人のために喜んで死ぬだけの気持ちがあれば、熱烈な敬慕の目で眺められる人とでなければ結婚しないと思っていたらしい。しかし、どんなに愛していても、また妻は正気を失い隔離されていても、社会的秩序である結婚制度をジェーンは尊重したのである。

## 8. ナサニエル・ホーソン『緋文字』(1850)

この物語にはいろいろな読み方があるが、愛をめぐる3つの世界観が提示されていると解釈することができる。①ピューリタニズム ②ロマンティズム ③聖書的世界観である。

ピューリタニズムの見方では、律法がすべてのコードであり、結婚制度を破ったヘスターに言い逃れは通用しない。ヘスターは一生涯胸に「A」(姦淫を示す)を付けた服を着続けなければならない。しかし、ヘスターは自分のしたことを悪いと思っていない。彼女は愛のない結婚より、心より愛せる人を選び、その人と結婚できなくても愛し続けることが重要だと考えて

いる。自然な感情の発露を尊ぶロマンティズムの恋愛観である。ヘスターが愛し、守ろうとした相手は教区牧師のデムズデルである。彼は最後にヘスターと駆け落ちすることを止め、神と自己との和解に命を賭けた。社会との関係、恋愛関係より以上に神と自己との関係を優先するのは聖書的な世界観であるが、ヘスターの生き方に感情移入するとデムズデルの描き方が曖昧に思えるだろう。結局、ヘスターも土地を離れることはなく、やがて人々から姦淫の「A」ではなく、天使の「A」だと言われるようになった。ひたむきな愛が人格を陶冶したと考えられよう。

イギリスでは19世紀初頭ロマンティズムが文学界を席卷し、ヘスターが考えたように恋愛至上主義的なエトスがあった。『フランケンシュタイン』を書いたメアリー・シェリーは詩人シェリーをその妻から奪い、結婚した。男性名で作品を発表したジョージ・エリオットは敬慕する男性ジョージ・ヘンリー・ルイスが妻とどうしても離婚ができなかったので、籍を入れず一緒に住むことを選んだ。エリオットの小説『ミドルマーチ』では結婚生活において妻が夫と対等の立場をとれない様子が描かれている。形式的な結婚に疑問を持つエリオットにとって、才能豊かな女性の活躍を奨励するルイスは、結婚という制度からはみ出ても愛し続けるに足る男性であったのだろう。それにしても正式な結婚ができないジョージ・エリオットにはさまざまな中傷や非難がつきまとい、自己の信念を全うするのは容易なことではなかった。

イギリスですべての成人女性に参政権が与えられるようになったのは1928年であった。どんなに能力があっても女性が社会を変えることがいかに難しかったか想像できよう。20世紀になってから結婚は恋愛からスタートすることが珍しくなくなった。宮廷風恋愛、そしてシェイクスピアの喜劇などからも想像できるように、文化が成熟し、女性が力をもたなければ恋愛は一時の熱情に終わりがちである。対等の恋愛結婚は女性の自立が必要なのであろう。

古代のギリシャ叙事詩から19世紀の英国小説を概観してきたが、恋愛結婚という形は近年のものである。文学における恋愛結婚というのは、前野氏の言うように「抑圧的な日常から解放されたいと願う内心の憧れが異性への憧れと結びつき、アモルフな情念の非日常的な力をロマンティックな文化型にはめ込めようとする欲求から生じている」(前野 4) と言えるかもしれない。しかし、現実をみると、今も昔も結婚が恋愛だけで成立しているものではない。閨閥結婚、政略結婚などは相変わらず存在する。恋愛結婚と呼ばれるものでも、愛さえあれば、ということではない。結婚アンケート調査の結果などを見ると、結婚相手に人格や相性は当然として、学歴、職業、経済力などが求める条件として挙げられているように、結婚は長い生涯を想定する、きわめて日常的な現実問題なのである。美しいドレスを身にまとい、その日だけの演出に多額の費用を払う披露宴は、非日常の世界と日常の世界が折り合いをつける橋渡しのステージといえるかもしれない。

### 〈参考文献〉

1. 水野 尚 『恋愛の誕生』（京都大学学術出版会、2006）
2. 前野みち子 『恋愛結婚の成立』（名古屋大学出版会、2006）
3. J・ルーゴフ、A・コルバン他『世界で一番美しい愛の歴史』小倉孝誠他訳（藤原書店、2004）
4. ジョン・R・ギリス 『結婚観の歴史人類学』北本正章訳（勁草書房、2006）
5. アンドレアス・カペルラス『宮廷風恋愛の技術』ジョン・ジェイ・バリ編／野島秀勝訳（法政大学出版部、1990）
6. C・S・ルイス 『愛のアレゴリー』玉泉八州男訳（筑摩書房、1972）
7. C.S. Lewis, *The Four Loves*, Harcourt Brace Jovanovich, NY, 1960.
8. G・K・チェスタトン『ヴィクトリア朝の英文学』安西徹雄訳（春秋社、1979）
9. 『聖書』新共同訳（日本聖書協会）
10. 阿部謹也 『西洋中世の男と女』（筑摩書房、2007）
11. ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク『トリスタンとイゾルデ』石川敬三訳（郁文堂、1977）
12. プラトン「饗宴」鈴木照雄訳 『筑摩世界文学大系3』（筑摩書房、1977）
13. ジェフリー・チョーサー「カンタベリー物語」西脇順三郎訳 『筑摩世界文学大系12』（筑摩書房、1977）